

職後は子供たちにピアノを教えるのを生き甲斐に続けていました。今でも八十歳になる教え子や日田の教え子より電話やお手紙をもらい、七十七歳の喜寿には日田高の音楽部員だった人たちが集まってすばらしいお祝いをして下さいました。その後も八十歳までは元気でいたいと願っていましたところ、この秋で米寿を迎えられながら驚いています。昨夏数え年八十八歳のおり、子供や孫たちが全員集まって賑やかな一時を過ごしました。最近は何年をとりすぎまして少しばかりの野菜を作ったり草花を育てたりしながら、ほんの少数の弟子たちとのふれ合いを楽しんでいます。お友達もあちこちにはいますけど、今でも青春時代を共にした上野の頃の友達とのつき合いがずーっと続いていますし、何でも話し合える大事なお友達です。

五、クラスメイトのこと

男子の方は八名全員亡くなりました。女性は六名亡くなられ、ただ今は十一名、まあまあ健康状態のようです。話はまた前に戻りますが、「卒業三十周年」のクラス会を昭和三十七年懐かしい音楽学校の講義室でさせてもらいました。(それ以前はお勤めや子育てや戦争も続き、なかなか集まるどころではありませんでした。) それ以来、平成三年までに十八回クラス会をし、青森、東京(四回)、京都、横浜、名古屋、四国、山陰、九州(四回)等々と楽しい一時を過ごしましたが年老いて集まることができなくなりまし。昭和三十年頃は男性の方四名、大阪、岡山、福岡、札幌等で女子大音楽科の教授をしていました。(あと四名はすでに亡くなっていました。) 女性も五、六名、教育大や短大音楽科に勤めています。

だが、最近はや家でピアノを教えたり歌の指導をしたりして楽しんでおられる様子です。私も命果てるまで音楽とともに生きられる喜びに感謝いたして一日一日を過ごしています。

(平成十年二月初筆、平成十一年十二月加筆)

〔第九回生。在校期間は昭和五年四月から七年三月〕

(1) 本書『演奏会篇第二巻』にプログラムと当日の写真が掲載されている。

合唱メンバーの女生徒たちは当時の服制に従い、紋付き袴姿である。プログラムには「合唱東京音楽学校生徒」と記され、臨教生徒を含む全校生徒総出演であった。

九 上野児童音楽学園

上野児童音楽学園は昭和八年六月に開園した。これより二年ほど前、乗杉嘉壽校長はヨーロッパ視察を命じられている。各国の音楽学校、音楽教育事情、そして音楽の社会的施設の視察などを目的とする約三ヵ月半のヨーロッパ滞在中、校長はイタリア、ドイツ、オーストリア、フランス、イギリスなどの長い伝統をもつ音楽学校を訪れ、庶民と学校との交流、社会へと開かれた音楽学校の音楽堂、音楽学校のオーケストラと職業的オーケストラとの互角の活躍などを目の当たりにした。視察先での所感の数々は当時の同声会報に寄稿されている。その内容は、視察先の校長についての印象、男女共学の教育システム、校舎改築の理念など多岐にわたり、さらには将来東京音楽学校が新しい音楽堂を建設する時には現在地に建設し、旧来の音楽堂を少し離れたところに残すのが望ましいとする構想におよぶ(今日、これは図らずも現実のものとなっている)。東京音楽学校を世界に通用する音楽学校に育てようとする情熱に溢れた文章は、鋭い先見性に富み、今日なお啓発的である。「一日も早

く歸京して學校の仕事にとりかゝらねばならぬと思ふと歸心矢の如くとなつた」(『同聲會報』第二〇二号 昭和九年三月 二八頁)と記した同校長は、帰国後、その言葉どおり東京音楽学校に着々と変革をもたらしつてゆく。上野児童音楽学園も、そうした新事業の一環としてとらえることができよう。おりしもわが国で音楽の早期教育の必要を説く声が強まってきた時期であつたが、昭和八年に東京音楽学校において早期教育の場が実現したことは、乗杉校長の英断と指導力を抜きにしてはあり得なかつたに違いない。

上野児童音楽学園は東京音楽学校の同窓会組織である「同声会」を母胎として設立、運営された。戦前の東京音楽学校では学校長が同声会長を兼任するのが通例であり、乗杉校長も当時の同声会長であつた。彼はまた上野児童音楽学園開園後は園長となつた。教育機関としての児童音楽学園がどのような手続きを経て認可されるに至つたのか、記録の上で辿ることはできない。いずれにせよ同声会は、専用の敷地建物を有する学校ではない。同声会の名称のもとに、生徒を募集し、東京音楽学校で週二回、放課後の空き教室を利用して小学生、中学生、女学校生のためにピアノ、ヴァイオリン、声楽などの個人レッスンや、ソルフェージュのクラス授業が行われていた。八年六月には男児の合唱団員を募集。二年ほどで消滅したが、これは明らかにヨーロッパの伝統ある少年合唱団に倣つたものであろう。学園での指導は東京音楽学校の教授陣が兼任したほか、同校の研究生などが担当していた。当時の東京音楽学校は在校生が自宅などで子供にレッスンするといったアルバイト(他のアルバイトも原則として同様)を禁じていたため、研究生たちは同声会の児童を初めての生徒として受け入れ、若い情熱を傾けて教えた。また同声会は音楽学校本科生および師範科生が教員無試験検定を取得するための教育実習の場としても活用された。

昭和九年十一月二十四日に第一回上野児童音楽学園演奏会を開き、翌十年二月二十六日には東京音楽学校の第七十四回定期演奏会に初出演。二百人の小学生がプリングスハイムの指導のもとドイツ語の特訓を受

け、マーラーの交響曲第三番に参加した。特訓の甲斐あつて、評者をして「子供の合唱が一番うまかつた」(『東京日日新聞』昭和十年二月十九日 大田黒元雄)と言わせるまでに上達した。三年後の十一年三月十八日に第一回卒業式を迎え、八十八名を送り出して出している。新聞は「音楽家の雛鳥」「天才少年少女の一群」などの見出しで取り上げて賛辞を惜しまなかつた。これらの演奏会のプログラムと批評の多くは本百年史「演奏会篇第二卷」に掲載されている。卒業生の中には引き続き東京音楽学校に入學しその後も逸材として活躍した人々も多い。しかし時代に戦時色が濃くなつてくると、社会に明るい話題を提供した同声会も時代の波にさらされ、官立の早期音楽教育の場を継続する夢は断ち切られた。戦時中には上野公園内に高射砲隊の陣地が建設され、職員や家族が次々に疎開して東京音楽学校の授業もままならなくなると、学園の生徒も減少し、募集を中止する事態に迫り込まれる。その状況は「同聲會室日誌」がわずかに数行で証言しているにすぎないが、授業を中断して生徒を防空壕に避難させる状況下では、もはや小学生を安全に受け入れることはできなくなつた。

そして十九年秋、上野児童音楽学園は空襲の激化と学董疎開などにより自然消滅する形で閉鎖された。

以下、上野児童音楽学園関係年譜と、『同聲會報』中のおもな関係記事から同声会の概要を紹介する。ただし、『同聲會報』の記事はあまりに膨大なため、紙面の都合により相当数の記事を割愛した。そして最後に、本書のために寄せられた当時の教師、生徒による回想を載せる。

この項に関して、東京芸術大学同声会事務局より戦前の同声会報の閲覧を快諾していただいたのみならず、当時の資料調査にご協力いただいた。ことに当時の担当者によつて記された「同聲會室日誌」が戦時中の同声会報中断後の上野児童音楽学園の状況を知る大きな手がかりとなつた。同声会は音楽学校自体の事業ではないため、音楽学校に残された記録としては、校舎の増改築に付随する寄付関係の書類が残されているにとどまる。同声会事務局の協力なしには上野児童音楽学園についてこ

まで明らかにすることはとうてい不可能であった。ここに記して深く感謝申し上げる次第である。

(1) 東京音楽学校教務嘱託石澤秀子氏(現名誉教授)の履歴によると昭和九年九月児童学園閉鎖のため解雇という記載がある。しかし閉鎖の正確な日付を文書などで確認するには至っていない。

〈付記〉音楽会館について

昭和二年十二月十五日には同声会館建設に関する打ち合せが行われ「同聲會報」第一三二号 昭和二年十二月、昭和七年の『同聲會報』に「音楽會館建設趣意書」が掲載され寄付を募った。

財団法人音楽会館は昭和八年四月に設立され、七月二十五日に登記された(『同聲會報』第一九六号 昭和八年七月・八月)。初代理事長は乗杉東京音楽学校校長、敷地はお茶の水の女子高等師範学校跡の一部と決定。昭和九年九月、上野児童音楽学園の運営を音楽会館に移行することが同声会評議会で決定した。

音楽会館は、後掲の趣意書に見られるように、演奏場、図書閲覧室、宿泊所、食堂、娯楽室などを備えた施設である。乗杉校長着任以前から懸案となっていた同声会館の構想は、社会教育に長く携わってきた同校長のヨーロッパ視察によってさらに発展したかたちを指摘すようになっていた。それは音楽学校と社会とがより密接に交流する開かれた場であり、将来的には児童音楽学園をそこに移して、職員生徒と子供たちとの交流を図り、東京音楽学校のレベルの音楽教育を社会に還元する媒体となるはずであった。

いずれにせよ時勢により、音楽会館建設の夢は上野児童音楽学園と同様立ち行かなくなつた。募金は目標額五万円には届かず、軍用機として献納されるという結果に至つた。

音楽會館建設趣意書

我國に於ける現代社會並教育の實情に對する音楽文化進展の重要

性に鑑み我等の東京音楽學校同聲會と日本教育音楽協會とが茲に一致協力してその課せられた責務を全うするといふ事は目下焦眉の急務でなければならぬ。

そしてこの責務達成の前提として先づ第一に實現さるべきは兩會活動の泉源たるべき會館の建設である。然もこの實現並にそれへの努力は兩會の活動を益々旺盛ならしめると共にその存在を愈々意義あらしめるもので又會の向上發展を約束する事に外ならぬ。故に同會同人間に在つても本音楽會館建設の問題は久しい間の懸案であつたが今日尙その實現を見るに至らぬ事は我等の等しく遺憾とする處である。

かの東京高師は會債募集に依りて宏大なる茗溪會館、廣島高師は創立後僅かに廿五年にして廣島及東京に夫々堂々たる會館を建て、また帝大の學士會館、商大の如水會館の如き、學校關係のものゝみでも枚擧に遑なき事は諸君も御承知の通りである。

茲に於て我等は敢然として我等の音楽會館の建設を提唱し、大方の御贊同を得て實現に向つて邁進せんとするものである。

即ち本會館は音楽に關する各種の研究所とし、娯樂社交の樂園とし、將又諸般の活動の源泉地たるは勿論、就中地方會員の爲に上京の都度その宿泊所として利用されるならば、その役目の大半が果されたと言つてよいであろう。

そこで先づプランとしては集會室(二ヶ中一は講堂兼演奏場)圖書閲覧室、宿泊所、娯樂室、食堂(常設)浴室(二ヶ所)事務室其他とし、構造は堅牢にして然も清酒専ら實質的とし地域は便利を本位として市の中央に卜する豫定である。

扱之が建設費は兩會役員の協議の結果、別記の如く會員各自の淨財を分納若くは即納とし地方一般篤志家の寄附を仰ぎ以て多年の宿願を成就せんとするのである。

敬愛する會員諸君 我等會員相互の福利の爲延ては我國音楽文化進展のために何卒我等の意のある所を諒とせられ、絶大の御盡力を賜り奮つて御寄附あらん事を茲に切願する次第である。

昭和七年七月

東京音楽学校同聲會長 乗 杉 嘉 壽
日本教育音楽協會長
〔同聲會報〕第一八五号 昭和七年七・八月 二頁

(一) 年 譜

上野児童音楽学園関係年譜

〔同聲會報〕『同聲會室日誌』に基づく

昭和八年

一月三十日

◆『東京芸術大学百年史 演奏会篇第二卷』にプログラム掲載
◇『東京芸術大学百年史 演奏会篇第二卷』に記事のみ掲載

三月十七日

同声会役員会(含日本教育音楽協会評議員、音楽会館建設委員)において、乗杉会長が、児童音楽学校を同声会独自の事業として計画したい旨を表明
同声会・日本教育音楽協会合同役員会において、上野児童音楽学園設立に関する協議がなされる

四月

「上野児童音楽学園案内」が同声会報に掲載される

五月二十七日

選抜考査
合格発表。百十八名が合格

五月二十九日

上野男児合唱団、百名にて設立される

昭和九年

三月三十日

開園式挙行
選抜考査

三月三十一日

合格発表。八十九名が合格

四月七日

入園式・授業開始

四月二十一日

皇后陛下行啓演奏会に出演◆

六月七日

上野男児合唱団に五十名追加

七月十四日

父兄会開催

九月十七日

財団法人音楽会館第二回評議員会にて、上野児童音楽学園事業経営が同法人に移管されることが決定

十月三日

東京音楽学校運動会に参加

十一月二十四日

第一回演奏会◆

昭和十年

二月十六日

東京音楽学校第七十四回定期演奏会、マーラー《第三交響曲》に出演◆

三月十一日

教生に対する謝恩会

四月六日

入園式・始業式。新入生は百六名

四月二十八日

学士会家族慰安会にて演奏

七月一日

上野男児合唱団は、學園二年に編入することとなり、希望者二十七名が編入

七月十三日

父兄会開催

十月十三日

東京音楽学校第七十六回定期演奏会に出演◆

十一月三十日

第二回演奏会◆

十二月二十日

ラジオ出演

昭和十一年

三月十八日

第一回卒業式◆

三月三十日

尋常科考査

三月三十一日

高等科考査

四月一日

合格発表。高等科に四十六名合格

四月八日

入園・始業式

四月十八日

第一回卒業生音楽演奏会◆

五月十日

学士会の家族会に出演